あなたのスキルは社会に役立つ
エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第115回 イトナブの歩んできた10年とこれから ～地方でゼロから始まった団体の奮闘記～

●高橋 憲一（たかはし けんいち） Twitter @ken1_taka

宮城県石巻市にはイトナブ[注1]という団体があります。イトナブとは「IT×遊ぶ×学ぶ×営む×イノベーション」の言葉を組み合わせて作られた名前で、ITに関するさまざまな教育や開発の事業を進めています。

2021年3月20日には「イトナブが歩んだ10年とこれからのイトナブ発表会」というオンラインイベント[注2]がありました。これをきっかけに、本連載でも何度か取り上げてきたイトナブのこれまでを振り返り、これからを考えてみたいと思います。

イトナブの成り立ち

大きな被害のあった地域での活動

イトナブがある石巻市は2011年3月11日の東日本大震災で大きな被害のあった地域です。さまざまな方が復興のため、さらに元より良い場所にしていこうと尽力していましたが、そんな中、石巻出身で東京でWeb制作を行う事業をしていた古山隆幸さんが「若者が地域で活躍できる場所を作りたい」という想いで立ち上げたのがイトナブでした。「震災10年後の2021年までに、石巻から1,000人のIT技術者を育成する」という目標を掲げ、2012年にスタートしました。

イトナブとHack For Japanの出会い

筆者がイトナブに出会ったのは2012年の7月に開催された第1回目の石巻ハッカソンでした。その中にIT Bootcamp（**写真1**）という、10名ほどのプログラミング初心者の高校生に、3日間で集中して1つのゲームアプリを仕上げるところまでを体験してもらう部門があり、その講師を務めたことに始まります。

イトナブを立ち上げて代表を務める古山さんが「どうやって石巻でIT産業を興すか、そのための人を育てるのはどうするのが良いか」と考えて人をたどり、エンジニアが技術を活用して東北のために何かできないかと活動していたHack For Japanの筆者らとつながりました。古山さんによると「石巻にはITエンジニアが少ない、というかそもそもIT産業がほとんどなかった。若い人にIT産業の魅力を伝えにくい環境で早くわかってもらうには、実際に

◆写真1　第1回石巻ハッカソンでのIT Bootcamp風景

注1　http://itnav.jp/
注2　https://youtu.be/FLb3-slwDcg

その最前線にいるエンジニアのみなさんをお招きするのが良いだろうと考えていた」とのことです。

このときはCorona SDK[注3]という、初心者でも比較的簡単に物理エンジンを使った2Dのゲームが開発できるツールキットを使って、最終日には参加者全員がオリジナルゲームを動かすところまでたどりつきました。自分で考えて作ったゲームが実際に手元のスマホで動くということは参加者にとって大きな達成感を得ることにつながり、それは講師の側にとっても「自分が書いたプログラムが動く」という初心を思い出させられるものでした。自分たちの技術でサポートして若者たちに喜んでもらえるというこの場での成功体験は、エンジニアとして復興支援活動で何ができるかを模索していた筆者らにとっても、地域の若者への教育が活動の1つの軸となることを確信した出来事でもありました。

イトナブがやってきたこと

これまでのイトナブの活動を振り返ってみると、1つは大人と若者（おもに学生）の交流できる場所を作ったということです。イトナブのオフィスは常時開放している場所があり、ITに興味がある学生が放課後や休日に気軽に寄ることができ、アプリを作ってみたいなどの同じ興味を持っている人たちが集まる場となっていきました。前述のオンラインイベントで行われた振り返りのYouTube Liveでは「楽しそうにやっていると自然にコミュニティになっていくのが実践されている場ですね」というコメントもあり、少なくない方がそのような印象を持っていることがわかります。ここに来た大人には「かっこいい背中を見せる」という役目があります。エンジニアであれば日々技術を楽しみながら探究する姿を、時には遊びながら、時には真剣に取り組みながら見せるということです。

石巻ハッカソン

2012年から毎年7月か8月に開催されており、夏の恒例イベントとなっています。毎回100名を超える人たちが石巻とその周辺だけでなく東京など各地から集まります。ハッカソン部門とIT Bootcamp部門があり、大人と若者が一緒になって3日間集中して開発するのが特徴のハッカソンです（2020年は新型コロナウイルスの影響で開催できませんでした）。

●イベントとしての進化

発表会の時間進行など運営面で年々進化をしてきていましたが、もっと良くしたいと若いメンバーが自分たちで考え抜いて企画し、「初心に帰って開発することの楽しみを大切にしたい」ということから、2019年にはそれまで用意していた賞は設けないことになりました。さらに最終日の発表会は各チームのブースがところ狭しと並び、屋台村というかフェスのような雰囲気を醸し出していました。単に成果発表を聞く場所ではなく各チームがブースで成果物を披露し、参加者に実際に触ってもらえるというものです（**写真2**）。日本で開催されるハッカソンは数あれど、なかなかこのような場はないのではないでしょうか。

発表会の会場は石巻グランドホテルという市内でも格式ある場所だったのですが、そのような会場で開催できるようになったのは、毎年夏のこの時期にこのイベントに参加するために多くの人が泊まりに来てくれていたことで、それなら会場としてもぜひ使ってほしいというホテル側からの打診があって実現したとのことです。これは、地域での認知度を着

◆写真2　2019年の石巻ハッカソンの発表会

注3　現在はSolar2Dと名前を変えて存続しています。
https://solar2d.com/

実に上げることができているからこそ実現したことだといえるでしょう。

教育活動

●東北TECH道場

いくつかの企業、団体の協力により2012年の11月から東北の各地で始められたもので、道場の名が示すように座学より参加者に実際に手を動かしてアプリ開発をしてもらうことに重点を置いており、講師がそのサポートをしています(**写真3**)。Androidアプリの開発に始まり、現在はUnityを使った開発も行っています。イトナブはその石巻道場を運営しており、石巻ハッカソンと並ぶイトナブの活動の原点と言えます(筆者もこの道場の講師として参加しています)。

●高校の授業、部活サポート

これまで石巻工業高校での授業や、宮城県大崎市にある古川黎明高校のパソコン部のサポートをしてきています。

●イトナブ塾

小学生向けのプログラミングワークショップで、「遊びから学びへ」をテーマにScratchなどを活用して楽しみながらプログラミングに興味を持ってもらえるように月に1回、石巻の子供たちを集めて開催されています。

低学年の子でも飽きないような、遊びの要素を中心にしたコースもあります。あるときの遊びコースではViscuit[注4]でシューティングゲームを作っていました(**写真4**)。Viscuitを使ったのは、もともとプログラミングされている「メガネ」と呼ばれる機能を使ってキャラクターを動かすので、自分で命令ブロックを組み立てて動かすScratchよりもシンプルな使い方で簡単に作ることができるためとのことです。

●ナブかつLAB

地域の企業、行政、エンジニアとイトナブでチームを組み、地域のプログラミング教育の底上げを目指す取り組みで、2019年11月から福島県郡山市などで進行中です。将来エンジニアとして働くための技術を身につけることを目標としています。

●その他

これまでの教育面での実績から、石巻のみならず岩手県滝沢市[注5]、神奈川県横賀市[注6]などでのWeb制作やUnityを使った開発ができる人材の育成事業にも協力しています。

開発事業

Webやアプリなど、さまざまな開発を請け負うようになっており、最近はWebのデザインからフロントエンド、バックエンドまで通してできるようになっています。

注4　https://www.viscuit.com/
注5　https://amatar.jp/
注6　https://yumeaka.jp/

◆写真3　東北TECH道場の様子

◆写真4　イトナブ塾でViscuitを使って取り組む様子

●テイクアウトマップ事業

コロナ禍で困っている飲食店の役に立てるよう、地域で技術を活かして何かやりたいということで、石巻とその周辺をカバーするテイクアウトマップ[注7]のサービスを2020年の4月に立ち上げ、飲食店を経営する企業と提携してネットを介した料理の宅配代行を始めています。

これをパッケージ化して、石巻以外でも山形市[注8]、盛岡市(6月リリース予定)に展開しています。

卒業生の活躍

ここでは、学んだ若者がさらに新しい若者に教えていくという良い循環が生まれているだけでなく、人材を輩出する場所という側面もあります。イトナブで学んだり、働いたりして巣立って行った人たちの活躍とその言葉を紹介します。

高校生のころにイトナブで学んだ若者が現在はあるIT企業のCTOを務めるまでになり、「応援される側から応援する側になりたい」と3月のイベントのスポンサーになることを申し出てくれました。

デザイナーとして在籍していたメンバーは、現在はフリーランスのデザイナーとして活躍しており、仙台の専門学校で非常勤講師も務めています。「イトナブにいたことで誰かに背中を追いかけてもらえるようなかっこいいデザイナーになりたいと思った。イトナブにいたことでさまざまな人と出会うことができ、人生の選択肢が増えた」と語っています。

また写真撮影や動画作成などのクリエイティブ面で才能を発揮するようになった別の卒業生は、「とくに初期のイトナブはおもちゃ箱をひっくり返したようなメチャクチャさだったという印象だった。だからこそ楽しんで何かをやることを教えてもらった」と言っています。

また別の初期メンバーはエンジニアとしての腕を磨くために東京の会社に転職し、プロジェクトで責任ある役割を担うようになり、日々張り切って仕事をしている成長っぷりを見せてくれています。

注7 https://order.takeoutmap.jp/
注8 https://y-eats.com/

仙台の大学在籍時にイトナブでインターンをして奈良県生駒市の大学院に進学したメンバーは、自分の移動した先でもイトナブの良い活動を展開したいと支部を作り、石巻ハッカソンin生駒を開催しました。

10年を経ての変化

「震災10年後の2021年までに、石巻から1,000人のIT技術者を育成する」という目標については、教育事業として2015年から集計した値では1,880名の若者に何らかの形でIT技術の教育を行ってきたことになり、育成という言葉をかなり広く解釈した形ではありますが達成できました。

そのすべての人がソフトウェアエンジニアになったというわけではありませんが、特筆できる例としては、2013年のまだ初期のころにプログラミングを学びに(遊びに)来ていた小学生が成長して高校を卒業し、昨年イトナブに入社して現在はWebのフロントのコーディングやデザインをして活躍する姿を見ることができます。また、先に挙げた卒業生たちもイトナブがあったから、そしてそこに関わったことで新たな道が開けたことは間違いありません。さらに2021年の4月には3名の新入社員を迎えて人も増えてきたので、5月からは石巻市内の広いオフィスへ引越して活動しています。

代表の古山さんが言っていた「以前は石巻にはITに関われる場所がなくて……」という課題は、サポートしてくれた方々、そしてイトナブのメンバーの尽力により、現在はイトナブがまさにそういう場所になったと言えるでしょう。

これからも都市部と地方部の格差のないプログラミングの学びの場を創ることに邁進(まいしん)していこうとしており、若者が学びの先輩となる大人と出会うためのまた新しい取り組みも計画中です。

コロナ禍でいまだ世の中の状況は不透明ではありますが、心配なく県をまたいでの移動ができるようになった際にはぜひ石巻のイトナブをのぞいてみてください。ここに地方で若者が活躍できる場所を作るヒントがあるかもしれません。SD